

地方都市における多層化地図を用いた場所性の分析に関する研究 — 埼玉県本庄市を対象として —

添田 信行
nobuyuki SOEDA

日本の地方都市において、町特有の価値を生かした整備や保全が望まれている。本研究では、都市の構造を分析し、住民意識を調査することで多層化地図を作成し、構造と意味の両面から町の特徴を抽出する手法を確立するとともに、それらの関係性を明らかにしていく。多層化地図を用いることで、様々な視点から場所の背後にある場所性を探ることで、強い意識を獲得する4つの要因を明らかにした。その結果、構造と意味の両面から意識される場所は最も安定して抽出されたが、それ以外にも住民の記憶により、一見無個性な場所でさえ重要な場所として抽出される場合も存在した。今後は、人々の意識にも着目した整備や保全が大切である。

Key Words : 多層化地図、地形、構造、住民意識、意味、本庄、地方都市、まちづくり

1. 研究の背景と目的

1-1 研究の背景

川越市や香取市(図1)のような伝統的建造物群保存地区のように、ある特定時期の歴史的景観が保全された町並みを形成する町は稀であり、多くの地方都市の場合、様々な変化を受けながら成り立ってきた結果として、複雑・雑然とした町となっている。このような町では、一見して無個性に見える町(図2)として捉えられがちである。加えて、これらの地方都市の中には、本庄市のようにシャッター商店街や駐車場が目立ち、中心市街地衰退の危機にさらされている例もある。しかし、これらの町は歴史が重層した結果であり、注意深く観察してみれば、地形・歴史・建築など、それぞれに特徴がある。

一方、まちづくりににおいて住民参加が重要視され、住民主体のまちづくりが行われている中、その活動自体も町の特徴である。さらに言えば、これらの重層した関係自体が町の特徴として価値あるものかもしれない。



図1. 香取市佐原の町並み



図2. 本庄市の町並み

1-2 研究の目的

日本中にありふれている一見特徴のない地方都市において、地域の特徴を活かした整備や保全を行うために、地域の特徴を探る方法を明らかにしていきたい。

そこで本研究では、江戸から現在までの地形図より読み取れる都市構造(以下、構造と表記)から構造層地図を、文献や住民意識より読み取れる場所の意味(以下、意味と表記)から意味層地図を重層できるような地図を作成する。これらを多層化地図の手法を利用することで重層分析し、構造と意味の関係性を探ることを研究目的とする。多層化地図とは、地形・土地利用・意識が集まる場所・時代など様々な層を重層した地図層のことをいう。

1-3 論文の構成

1章の最後に研究対象地である本庄市の概要について記す。2章では地図を利用した地域分析・まちづくり・研究に関する事例を述べ、本研究の位置づけを行う。3章で用語の定義と地図を利用した研究方法を示す。4章では構造層地図と意味層地図それぞれの分析結果を示す。5章ではそれらを多層化地図にすることで場所の分類を行い、6章に多層化地図による考察を行う。最後に、7章で研究成果と今後の展望と課題を記す。

1-4 対象地の概要

本研究では、埼玉県本庄市を研究対象地とする。本庄市は、埼玉県の西北端に位置し(図3)、名峰・赤城山、棒名山を北に、噴煙たなびく浅間山を西に、南に秩父連峰を望む町である。

江戸時代に、中山道が整備された。本庄宿は、西国や日本海方面から江戸に出入りする際の中継点として宿の機能が年々拡大されたうえ、利根川の水運を利用した河岸が賑わい大きく発展し、中山道最大の宿場町となった。

明治時代に入ると、蕨の一大集散地として発展し、「日本一の蕨のまち」と呼ばれるまでに変容した。²⁾

昭和29年、本庄町・藤田村・仁手村・旭村・北泉村が合併し、本庄市が誕生した。当時の人口は4万人だった。さらに平成18年の市町村合併により児玉町と合併し、現在は、人口8万人の地方都市となっている。

一方、本庄には、本庄まちNE Tのような市民主体のまちづくり団体があり、様々なまちづくり活動を行っている。また、本庄で撮影された映画である「ペン偽らず」が空き店舗で上映されるなど、様々な視点から市民主体のまちづくりが行われている。

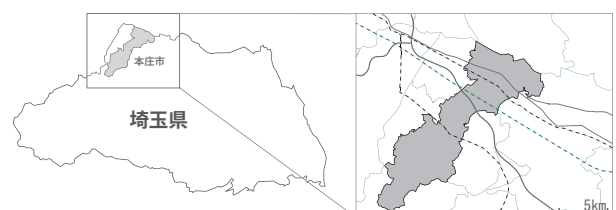


図3. 埼玉県本庄市の位置

2. 研究の位置づけ

2-1 既存の地域計画と地図

①地域分析に用いられる地図

ランドスケープ・アーキテクチャーの創始者と考えられているのは、Frederick Law Olmsted(1822-1903)である。4100haに及ぶ広大な敷地のプロジェクトでは、科学的調査と、森林の多面的利用を考え、動植物を保全するとともに、レクリエーション用地の提供、水源の維持、大気浄化、木材の生産などを同時に達成しようとした。また、その下で働いていたのが、Warren H. Manning(1860-1938)である。1910年頃、電気が一般的に利用できるようになり、ライトテーブルがつくられ、トレース作業が容易にできるようになった。そのことにより、Manningがオーバーレイという分析手法を初めて行い、何枚もの主題図を重ねて新しい情報を得たのである。また、土壌図や河川図、森林図などを何百枚も集めて、ライトテーブルを用いたオーバーレイにより、アメリカ全域のランドスケープ・プランを作成した³⁾⁴⁾。

Ian L. McHarg(1920-2001)は、著書「Design with Nature」⁵⁾において、植生、土壌、水系などの地形的要素を地図上で重ねることで、高速道路などの経路選択や土地利用を検討している。この手法に影響され、日本においても、1998年に環境影響評価法が前面施行され、環境アセスメント⁶⁾においての景観分野において、地形、水系、土壌、植生などの地形的要素を地図上で重ねることで適切な景観区分を行った。

Kevin Lynch(1918-1984)は、イメージマップという現在では最も典型的な都市構造の抽出方法を提唱した。住民に町の地理的イメージを描いてもらい、都市記憶の地理的骨格を形成する要素として5類型を見出している。5類型とは、i. パス paths、ii. エッジ edges、iii. ノード nodes、iv. ディストリクト districts、v. ランドマーク landmarks である⁷⁾。

②参加型まちづくりに用いられる地図

従来のまちづくりに関しては、住民参加・市民参加の重要性が主張され、まちづくりの手法は様々なものが出てきており、一般の住民が街に関心を持ち、愛着を感じるようなきっかけがつくられている。実際に、市民が主体であるまちづくり団体も各地で数多く存在している。その中で、よく使われるツールとして地図がある。

まちづくりに関しては、地図は、マッピング手法⁸⁾として様々な利用されている。70年代の「環境点検マップ」にはじまり、「防災診断地図」・「ヒヤリ地図」・「バリアフリー点検地図」などテーマにより名称も異なるが、市民の認知している地域情報を地図上に記録することによって、地区の「カルテ」をつくりあげるものがある。また、「まちあるき」や「まちかどオリエンテーリング」等のフィールドワークと組み合わせてマッピングを行う

ことにより、発見・再認識した情報を共有することができるといった手法も行われている。さらに、中村⁹⁾の提案している住宅地図を用いてまちあるきを疑似体験する「ガリバー地図」等の手法もあり地域という空間を対象とするまちづくりには欠かせない手法となっている。

また、Rinner、嵯崎、真鍋らは、インターネット上に地図を公開し、その地図に情報を付加していくという特徴を持ったシステムをそれぞれ開発し、仕様開発と実践活用の報告をしている。さらに、真鍋ら¹⁰⁾は、上記三者のシステムを、ガリバー地図の「地図に情報を記入し閲覧する機能」をIT化したもの、すなわち「インターネット書込地図型情報交流システム」として位置づけ、「カキコまっぷ」として、課題と展開可能性を明らかにしている。このように、地図も進化し続けている。

一方で、地域の実態や将来に向けてのヴィジョンとしての地域イメージを表現する地図として、吉阪隆正は魚眼マップ¹¹⁾¹²⁾を開発している。吉阪は、「魚眼地図は、全体と部分を一枚に収めているために、全体を考えるとときに部分からのフィードバックを直ちにうけて進められるし、細部を検討する時にも常に全体とのかかわり合いを考慮に入れることができる」と述べている。要するに、まちづくりに生かす場合には、計画対象エリアとその周辺の関係性が一目で分かるという特徴を持つ。

歴史を遡れば、江戸・明治期の絵図や昭和初期の吉田初三郎の鳥瞰図¹³⁾などもある。これらは、想像力を駆使して自らの視座を高みにあげ、景観構造を見事に表現しているものである。これらの手法は、魚眼マップの手法に近く、日本では、歴史的に全体と部分を一体の空間として捉えていたと考えられる。

2-2 既存研究と本研究の位置づけ

地図を利用した研究には以下のものがある。

マテオ・ダリオ・パオルッチ・宮脇勝「群馬県山村集落六合村赤岩地区における文化的景観に関する研究 - 歴史的な絵図、地籍図、土地台帳を用いた農地のランドスケープの歴史の変遷 -」都市計画論文集(2005)¹⁴⁾

江戸時代から現在までの地籍図を一つの地図データベース上に重ね合わせて比較することで、土地利用が変化しない地区を抽出し、今日景観上保存すべき地区を地図上で顕在化させている。

また、歴史的な文脈調査に地図を利用し、歴史の重層した複雑、雑然とした都市である地方都市を対象としている研究¹⁵⁾もあるが、住民意識との関係性から整備や保全の方向性を探る研究はない。

これらの論文では構造のみに言及しており、住民意識との関係性を考察したものではなく、構造と意味との関係性を明らかにする必要があると考える。本研究では、構造と意味の両面から町の特徴を抽出するとともに、それらの関係性を明らかにするところに特徴がある。

3. 研究方法

3-1 研究方法の概要と地図用語の整理

本研究では、構造を地形図分析調査から、意味をワークショップ（以下、WSと記載）調査・文献調査から把握する地図層群を作成する。それらの地図層群を同スケールで重層できるようにし、今まで見えなかったものをも可視化することで、まちの構造と意味を多視点的に比較・考察する。多層化地図のベースマップとして、ゼンリン電子住宅地図デジタウン埼玉県本庄市¹⁶⁾を基にVector WorksでCADデータ化することで利用する。

表1に多層化地図の構成を示し、図4に多層化地図の作成手順を示した。図4のように、原図をある時点で加工したものを地図と呼び、それらの地図層を同じ層において複数重ねたものを地図層と呼ぶ。本研究では構造層地図と意味層地図の2種類の地図層を作成した。

3-2 構造の分析方法

構造の分析は、時代ごと・スケールごとに地形と土地利用の地図を作成することで行う。1:50000と1:3000の2種類のスケールで地図を作成することにより、全体と部分の関係も考慮することができると考える。

①地形図分析広域調査

地形図分析広域調査を行うにあたり、国土地理院の発行している明治40年・昭和42年・平成10年の地形図¹⁷⁾(1:50000)を利用し、I市街地・集落、II地形の読み取れる地図を作成する。また、昭和42年の地形図を利用する理由は、急速な都市化が進む前であり、市街地の広がる様子を読み取ることができるからである。

②地形図分析詳細調査

本庄市民俗資料館所蔵の明治18年・昭和42年の地形図¹⁸⁾(1:3000)を利用し、i 寺社仏閣、ii 公共用地、iii 工場用地、iv 大型店舗（スーパーマーケット・ホテル）、v 宅地、vi 農地（桑畑・田・畑）を読み取れる地図（図6～図8）を作成する。

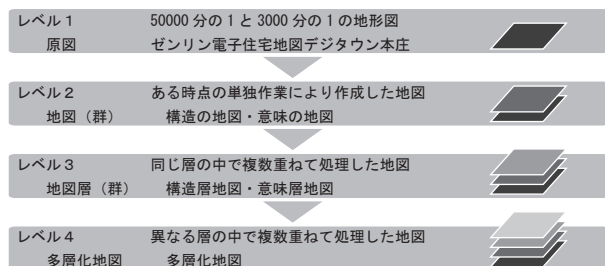


図4. 多層化地図作成の手順

表1. 本研究における多層化地図の構成

地図の名称	構造層地図		意味層地図	
	調査方法	地形図分析広域調査	地形図分析詳細調査	ワークショップ調査
年代	地図	地形図 (国土地理院発行) 1:50000	地形図 (民俗資料館所蔵) 1:3000	住宅地図 (ゼンリン電子住宅地図デジタウン) 1:1500
明治18年			○	
明治40年	○			
昭和30年				○
昭和42年	○		○	○
昭和50年				○
平成元年				○
平成20年	○		○	○

3-3 意味の調査方法

意味の調査は、WS調査により現在の視点から見た過去と現在の場所への意識を抽出するとともに、文献調査により過去の場所への意識を抽出し、それらを地図に表現することにより調査を行う。なお、場所への意識を抽出するとは、意識が抽出された場所とその意識を記録することをいう。その意識とは、エピソードのことである。

①ワークショップ調査

市民主体のまちづくり団体である本庄まちNETと連携し、表2の通りWSを行った。このWSは場所意識を抽出することを目的とし、参加者にとっても実りあるものとするため、地域の現状や課題を認識・共有し、意見交換をする場としても提供できるようにした。

WSでは、1800m×1600mの範囲を1/1500の縮尺で示した地図をベースに、記憶に残る場所にエピソードを書き込んでもらうことで、様々な場所意識を抽出した。1回目では、①子供②大人③現在の3つのテーマを設定し、3つのグループで9枚の地図を作成してもらった。2回目では、1回目で抽出した場所意識を時代別に分類して記入した地図をベースに、上書きする形で新たな場所意識を抽出した。1回目同様に、3つのグループで行ったが、時代別に場所意識を抽出するために、参加者の年齢や在住歴別にグループを作ることで、より場所意識を抽出しやすようにした。また、2回目では「こだわりたい場所は？」という質問を行い、これからのまちづくりへの想いを語っていただくと同時に、場所意識の多く集まる場所の抽出を試みた。

これらの結果は、50mメッシュのグリッド上に意識が多く抽出された場所が濃くなるよう地図に表現した。

②文献調査

市勢要覧、新聞、写真集などから、掲載されている場所を意識が向けられていたと解釈して抽出する。この調査では、現在から過去を遡るといった記憶のフィルターを全く通さないため、ワークショップ調査やヒアリング調査では抽出できないその時代から見たその時代の場所への意識だけを抽出することができる。

抽出された場所は、文献に掲載されている数や種類などにより、場所への意識を地図上にK.リンチの5類型であるi.パスpaths、ii.エッジedges、iii.ノードnodes、iv.ディストリクトdistricts、v.ランドマークlandmarksを利用することで可視化し地図にする。

表2. ワークショップの概要

日時・場所・参加人数	ワークショップ内容
10月25日(土) 13:30～16:30 本庄市民プラザ 27人(スタッフ9人含)	記憶と五感から感じとる本庄のまち テーマ1: 子供目線で過去の場所意識を語る テーマ2: 大人目線で過去の場所意識を語る テーマ3: 今の場所意識を語る
11月22日(土) 13:30～17:00 本庄市民プラザ 24人(スタッフ6人含)	地図にした「場所意識」と景観まちづくり テーマ1: 思い出しマップづくり ※年代別に過去の場所意識を語る テーマ2: こだわりマップづくり ※グループごとにこだわりたい場所を選定

4. 地図による調査結果

4-1 構造の分析結果

①明治 18 年の構造層構造

図 6 より、市街地の大きさは江戸の宿場町とほぼ変わらず中山道沿いに張り付くような町となっていることが分かる。また、現在でも残る寺社仏閣が市街地の際に存在し、その裏はすぐに農地である。駅前には多少の建物が見られるが、開発されておらず、ほとんどの地域が農地もしくは原野であった。

②昭和 42 年の構造層地図

図 7 より、明治 18 年の頃と比べると、市街地がかなり広がっていることが分かる。そのため、寺社仏閣の外側に大規模な敷地として工場が乱立していることが分かる。さらに、その外側には田・畑が広がっている。

また、用水として利用されていた久城堀がまちの中心を流れている。

③現在の構造層地図

図 8 より、市街地はさらに拡張され農地が著しく減少したことが分かる。かろうじて残る都市内農地は、市民農園として利用されている。また、工場はほとんどなくなってしまい、大きな敷地の跡地には大型店舗やホテルが大きな敷地を残しながら存在している。学校や寺社仏閣の敷地は、空間・用途ともにそのまま残されている。



図 6. 土地利用の構造層地図 (明治 18 年)



図 8. 土地利用の構造層地図 (現在)

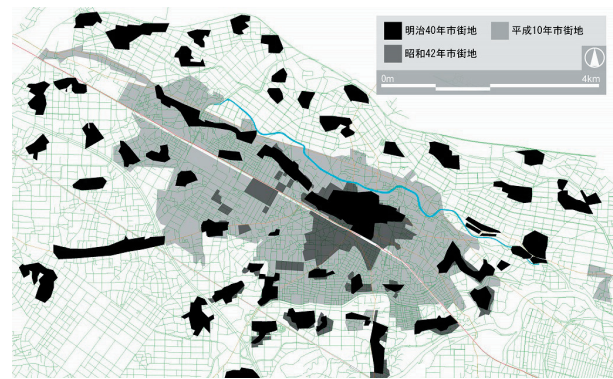


図 5. 市街地拡大の様子

④構造層基本図

地形・水系・土地利用において、昭和 42 年から現在まで変化のない場所を抽出することで作成する地図である。昭和 42 年の構造層地図と現在の構造層地図の両方を考慮しているので、構造層の基本図とした。意味層地図と重層する時にも考察しやすく、様々な関係性が見えてくると期待できる。本庄においては、等高線・元小山川・寺社仏閣・学校・街路などが抽出された。

⑤中心市街地の拡大

地形図分析広域調査により、図 5 のように明治 40 年～現在までの市街地の拡大の様子を確認することができた。明治 40 年から残る集落や昭和 42 年以降急速に広がりを見せていることが分かる。



図 7. 土地利用の構造層地図 (昭和 42 年)



図 9. 市勢要覧による意味層地図 (昭和 26 年～平成 16 年)

4-2 意味の調査結果

①文献調査結果

昭和 26 年から行政が約 5 年おきに発行している市勢要覧 10 冊において、写真が掲載されていた対象をその時代に意識の集まっていた場所とし抽出した。それらを図 9 のように地図上にランドマーク landmarks とパス paths により可視化し、他の層と重層できる地図とした。

掲載回数 6 回以上の場所には、利根川と阪東大橋、若泉公園、金鑽神社、銀座通り、本庄市民俗資料館があった。その中でも、本庄市民俗資料館は、検察庁であった時にも掲載されており、時代によって違う用途で掲載されていた。ローヤル洋菓子店や諸井家のように、用途が変化し残されていることで初めて掲載される例もあった。

また、街路では中山道・国道 17 号・関越自動車道の掲載回数が 3 回に対して、銀座通りの掲載回数が 6 回と非常に多くなっていた。

②ワークショップ調査結果

WS 調査により抽出された場所意識は、若泉公園・中山道・銀座通り・三交通り・金鑽神社・本庄駅前に多く分布していることが分かった。図 10 は、全 2 回の WS で抽出した全ての場所意識を可視化した地図と、場所意識が多く集まった代表的な場所とそれ以外の場所に分布した場所意識の割合を表したものである。

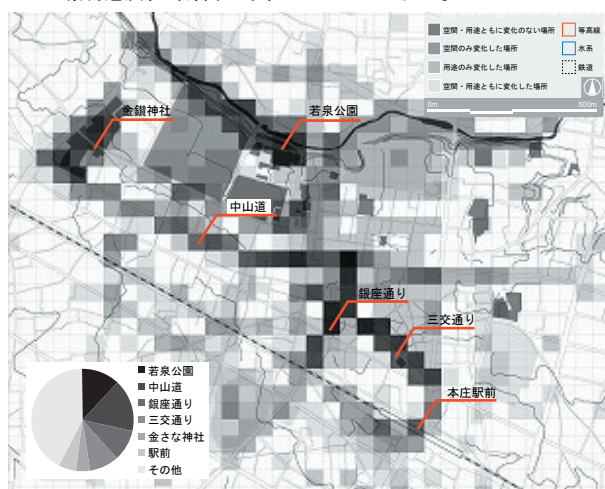


図 10. 意味層地図 (1940 ~ 2008 年)

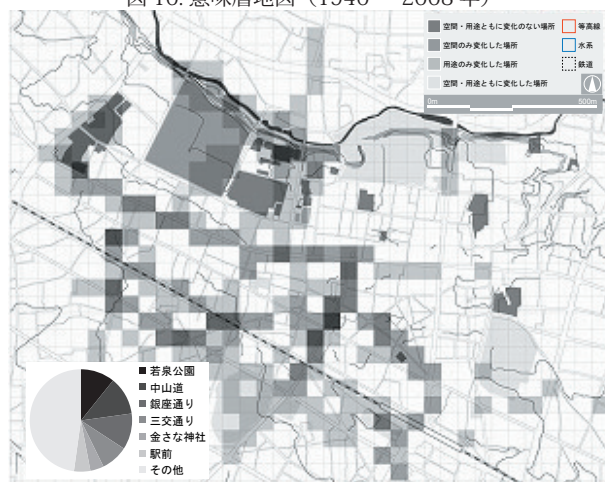


図 12. 時代別意味層地図 (1970 ~ 1990 年)

③時代別意味層地図

図 11 から分かるように 1940 ~ 1970 年は、若泉公園・中山道・銀座通り・三交通りに集中する結果となった。特に、中山道には全体の場所意識の 25% が集まり、住民にとって多くの記憶が残っている街路といえる。また、若泉公園と中山道の間にある金鑽神社や西小学校の周りにも意識が集まった。

図 12 から分かるように 1970 ~ 1990 年は、中山道・銀座通りに集中した。また、本庄駅の南側や線路沿いにも意識が集まるようになってきているのが分かる。

図 13 から分かるように 1990 ~ 2008 年は、特に集中している場所は見られないが、今まであまり場所意識の集まらなかった裏通り・市役所周辺・駅前通りにも意識が集まっていることが分かる。

時代別に、比較してみると、時代が新しくなるほどその他の項目の割合が増え、場所意識が分散していることが分かる。

④こだわりたい場所

2 回目の WS の最後に質問したこだわりたい場所の調査結果は、全 2 回の WS により場所意識が集まった若泉公園・三交通り・金鑽神社などに集中する結果となった。しかし、1990 ~ 2008 年にあまり集中しなかった中山道・銀座通りには同じくあまり集中しない結果となった。

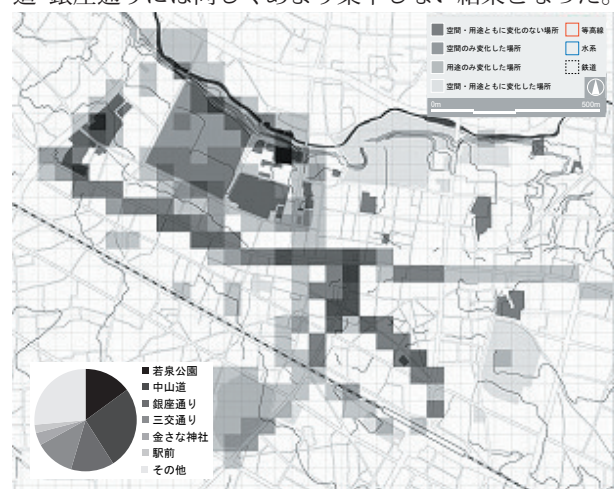


図 11. 時代別意味層地図 (1940 ~ 1970 年)

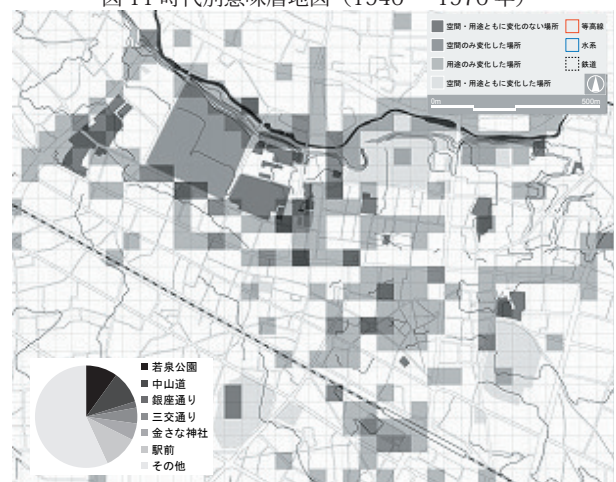


図 13. 時代別意味層地図 (1990 ~ 2008 年)

5. 構造と意味による場所の分類

5-1 構造層地図による場所の分類

地形と土地利用に着目することで、構造層地図により以下の4種類の場所に分類した。

①地形に特徴があり、土地利用の変化がない場所

図14のように、阿夫利天神社エリア・城山稲荷神社エリア・八坂神社エリアの3箇所が抽出された。阿夫利天神社エリア・城山稲荷神社エリアには、段丘があり、その下を元小山川が流れている。一方、八坂神社エリアには、等高線を見てもわかるように複雑な地形となっている。土地利用はそれぞれ寺社仏閣であり、江戸時代から変わっていない。また、阿夫利天神社エリアには、明治時代から変わっていない若泉第一公園もある。

②地形に特徴があり、土地利用が変化した場所

図14のように、若泉運動公園エリア・若泉第二公園エリア・富士機工跡エリア・本庄市役所エリアの4箇所が抽出された。この4箇所全てに、段丘があり、その下を元小山川が流れている。土地利用はそれぞれ変化しており、段丘の下のはほとんどは昭和30年頃まで水田や畑であった。段丘の上は様々な土地利用が変化しており、市役所の前は本庄城址があった。若泉第二公園の上には西小・中学校があり、その前は女学院があった。現在は女学院の碑が西中学校の前に残されている。富士機工は平成19年に取り壊され、現在は空き地である。

③地形に特徴がなく、土地利用の変化がない場所

図14のように、金鑽神社エリア・安養院エリア・円心寺エリア・大正院エリアの4箇所が抽出された。それぞれ地形には特徴がなく、土地利用は寺社仏閣であるため、江戸時代から変化していない。

④かつて水系があった場所

昭和42年頃まで久城堀が本庄のまちなかを流れていた。現在は暗渠化されるものの、道として残っている。また、そのほかに氾濫源となっていた場所が図14のように確認されている。¹⁹⁾²⁰⁾

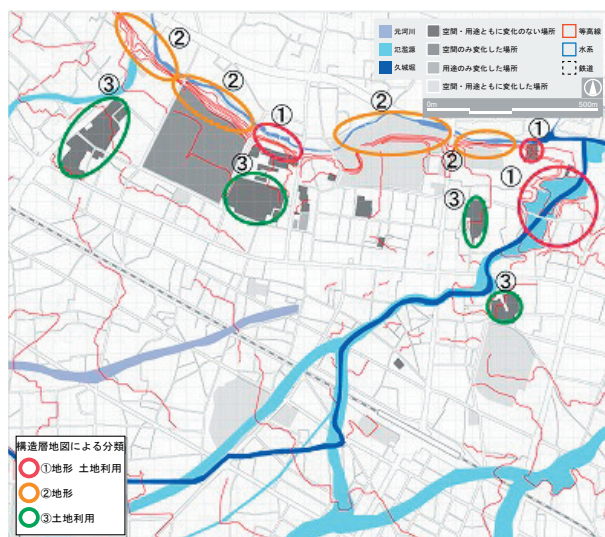


図14. 構造層地図による場所の分類

5-2 意味層地図による場所の分類

WS調査により得られた時代別意味層地図により、以下の3種類の場所に分類した。

A. 全ての時代において意識されている場所

1940～2008年の時代において常に意識された場所を抽出した。若泉公園、阿夫利天神社、金鑽神社、佛母寺などの寺社仏閣や公園と、中山道、銀座通り、三交通りの通り名はエピソードは変わるもののキーワードを変えずに全ての時代において同じ場所に抽出された。一方、民俗資料館や関根菓子店、ますや、石井のたいやき、みさご酒場、ときわ座、アピタ、ブララ、S A T Y、赤かんぱん、ローヤル洋菓子店、名店街などは、全ての時代において同じ場所として抽出されたものの、エピソードもキーワードも変わっていることがあった。その場所には、何があっても注目されてきた証拠であり、まちづくりをする上で非常に大切な場所だといえる。

B. 二つの時代において意識されている場所

1940～1990年の二つの時代において抽出された場所が最も多かった。これらの場所は、中山道、銀座通り、三交通りの一部に集中しており、1990～2008年の間に意識されなくなった場所ともいえる。また、1970～2008年に意識された場所には、市立図書館やコストリカ喫茶店などが挙げられるが、多くない。このことから、1970～1990年に本庄の新しい場所で意識を集めるようになった場所はほとんどないといえる。

C. 一つの時代しか意識されなかった場所

1970～1990年と1990～2008年の場合が圧倒的に多く抽出された。1970～1990年には線路の南側に意識が集まっており、友愛幼稚園や喫茶店、ゲームセンターなどの場所に意識が集まっている。現在はなくなってしまっているものがほとんどなので、この時代にしか意識が集まらなかったと考えられる。1990～2008年には、東側に意識が集まっており、新しくできた駅前通りや市役所の影響であると考えられる。

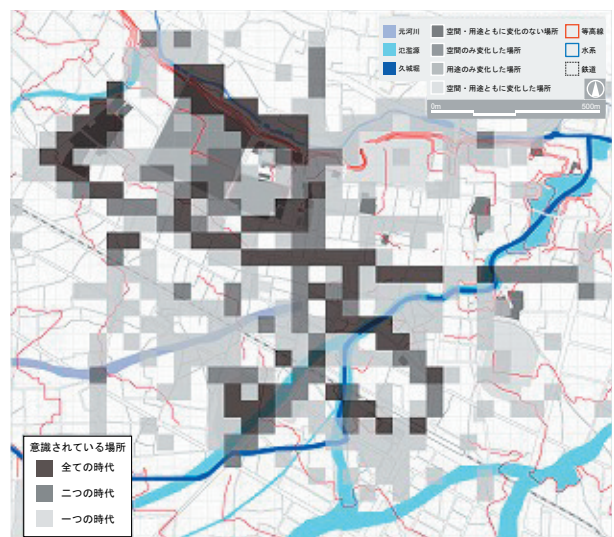


図15. 意味層地図による場所の分類

5-3 多層化地図による場所の分類

5-1, 5-2 において、構造層地図による場所の分類と意味層地図による場所の分類をそれぞれ行った。この章では、構造層地図と時代別意味層地図を重ね合わせることで多層化地図を作成し、さらなる場所の分類を行う。図 5-1 は、構造層地図により 5 類型に分類した場所と時代別意味層地図により 3 類型に分類した場所との組み合わせにより、15 類型に分類した場所の位置付けである。5 章では、これらの 15 類型を①多層的に意識が集まる場所、②意味層に意識が集中する場所、③構造層に意識が集中する場所、④断片的に意識が集まる場所の 4 つに大きく分類した。この章では、このように分類した場所がこだわりマップと文献調査による意味層地図やどのように関係してくるのかを明らかにする。

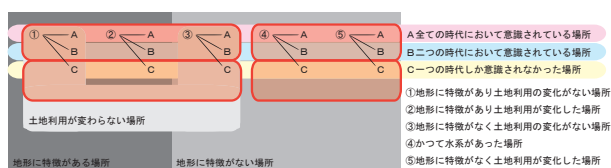


図 16. 構造層地図と意味層地図による場所の分類

①多層的に意識が集まる場所

両方の地図層から抽出される場所を多層的に意識が集まる場所とした。この場所として金鑽神社と若泉公園が抽出された。全ての時代に意識が集まった場所の半数が構造層地図から抽出される場所に集中しており、構造と意味に何らかの関係があると考えることができる。

金鑽神社と若泉公園にはこだわりたい場所としても、意識が集まっている結果となった。若泉公園の理由としては、子供の頃の記憶を大切にしていきたいというもの、これからの整備に向けての想いの大きく二つあった。

文献調査でも若泉公園と金鑽神社は多く抽出された。しかし、構造や意味で抽出された範囲は若泉第二公園や佛母寺まで及んでおり、文献調査では若泉第一公園と金鑽神社しか掲載されておらず、多層的に意識が集まる場所の一部しか意識が集まらなかったといえる。

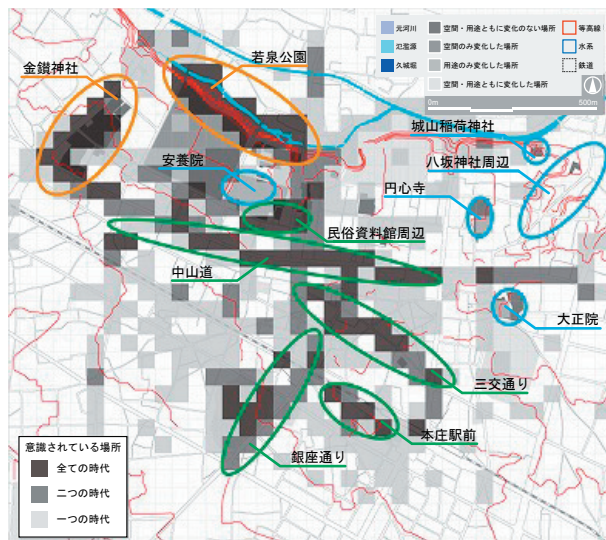


図 17. 多層化地図による場所の分類

②意味層に意識が集中する場所

構造層地図からは抽出されにくい、意味層地図から多く抽出される場所を意味層に意識が集中する場所とした。図 17 を見てわかるように、意味層に意識が集中する場所は中山道、三交通り、銀座通り、本庄駅前、民俗資料館周辺が挙げられた。

中山道、三交通り、銀座通りには、こだわりたい場所では意識を集めていた。赤かんぱんの2階を開放したいという話やすず薬局の前の空き地に福祉施設を入れた複合施設をつくるという話など具体的な提案に繋がる話まで出ていた。本庄駅前、民俗資料館周辺には、こだわりマップでは意識があまり集まらなかった。

文献調査では、銀座通り、民俗資料館周辺に多く意識が集まっていた。銀座通りは街路で最も掲載回数が多く、6 回であった。民俗資料館周辺の掲載回数は、民俗資料館が 6 回、民俗資料館の前にある田村本陣の門が同じく 6 回であった。また、中山道の掲載回数は 3 回で、本庄駅前は 4 回、本庄南口広場は 4 回だった。時代別意味層地図やこだわりマップでは非常に多くの意識を集めていた三交通りには、文献調査からは全く意識が集まらない結果となった。この三交通りや①で述べた佛母寺や若泉第二公園のように文献調査と住民意識の間には、差があり、文献からは拾えない本庄の特徴が存在することが明らかとなった。

③構造層に意識が集中する場所

意味層地図からは抽出されないが、構造層地図から多く抽出される場所を構造層に意識が集中する場所とし、その場所の抽出と簡単な考察を行う。図 17 を見てわかるように、構造層に集中している場所は安養院、円心寺、城山稲荷神社、大正院、八坂神社周辺が挙げられた。

これらの 5 つの場所は、こだわりたい場所として全く意識を集めなかった。金鑽神社のように緑が多く残っていれば、自然的環境による意識により、現在でも住民にとってこだわりたい場所になったかもしれない。

文献調査からは、安養院、円心寺に意識が集まっていた。安養院が 4 回、安養院の墓地にある小倉家の墓が 3 回掲載され、円心寺の山門は、2 回掲載されていた。城山稲荷神社は、1 回だけ掲載されていた。その他の大正院、八坂神社周辺については、全く掲載されておらず、文献調査からも意識が集まっていないといえる。

④断片的に意識が集まる場所

構造層地図にも意味層地図にも意識が集中しない場所も存在している。一つの時代のみ断片的に意識が抽出された場所は、場所そのものに対する意識ではなく、そこに存在したものに対する単発的なエピソードが多く、今はどうなっているかわからないというものが多くあった。また、かつて水系があった場所との比較も行ってみたが、全く関係性を見つけることができなかった。

表 3. 場所と人々の記憶に残るための 4 つの要因の関係

分類	地域	場所		物理変化		意識変化		記憶に残っている要因		
		過去	現在	用途	空間	過去	現在			
①	若泉第一公園		若泉第一公園 写真左 ^{※1} :1958 写真右 ^{※2} :2008		×	×	◎	◎	◎	自然的環境による意識 空間的立地による意識 行為的継続による意識
①	佛母寺		佛母寺 写真左 ^{※3} :1992 写真右 ^{※2} :2008		○	×	◎	◎	◎	自然的環境による意識 空間的立地による意識 行為的継続による意識
①	金鑽神社		金鑽神社 写真左 ^{※1} :1967 写真右 ^{※2} :2008		×	×	◎	◎	◎	自然的環境による意識 空間的立地による意識 行為的継続による意識
①	若泉第二公園		清水川原 ▼ ゴミ捨て場 写真左 ^{※4} :1967 ▼ 若泉第二公園 写真右 ^{※2} :2008		○	○	◎	○	◎	自然的環境による意識 空間的立地による意識 行為的継続による意識 様相変化の履歴による意識
②	中山道	サンライズおもちゃや まちあい館		○	×	○		○		空間的立地による意識 様相変化の履歴による意識
②	中山道	マユ倉庫 ローヤル洋菓子店		○	×	×		○		空間的立地による意識 様相変化の履歴による意識
②	銀座通り	赤かんばん ホンダ		○	×	◎		×		空間的立地による意識 様相変化の履歴による意識
②	銀座通り	市役所 市民プラザ		○	×	◎		○		空間的立地による意識 様相変化の履歴による意識
②	安養院 周辺		検察庁 写真左 ^{※1} :1951 ▼ 図書館 ▼ 民俗資料館 写真右 ^{※2} :2008		○	×	○	○	◎	空間的立地による意識 様相変化の履歴による意識
②	安養院 周辺	本庄町役場 関根菓子店		○	×	○		◎		空間的立地による意識 様相変化の履歴による意識
②	銀座通り		ときわ座 写真左 ^{※5} :1956 ▼ ときわ スーパー ▼ 北海亭 写真右 ^{※2} :2008		○	○	◎	○	○	空間的立地による意識 様相変化の履歴による意識
②	駅前		木造の駅舎 写真左 ^{※1} :1967 ▼ 現在の駅舎 写真右 ^{※2} :2007		×	○	◎		○	空間的立地による意識 行為的継続による意識 様相変化の履歴による意識
②	駅前	ニチイ SATY プララ		○	○	○	◎	○		空間的立地による意識 様相変化の履歴による意識
②	安養院 周辺	竹藪 病院 市立図書館		○	○	○	○	◎		空間的立地による意識 様相変化の履歴による意識
②	銀座通り		赤かんばん ▼ 空き店舗 写真左 ^{※4} :1990 ▼ ホンダの 駐車場 写真右 ^{※2} :2007		○	○	◎		×	空間的立地による意識
②	銀座通り	杉山呉服店 名店街 駐車場と空き地		○	○	○		×		空間的立地による意識

※分類 (①…多層的に意識が集まる場所、②…意味層に意識が集中する場所)

※物理変化 (○…変化あり、×…変化なし)、意識変化 (◎…意識が多く集まった、○…意識が集まった、×…意識されなかった)

※ 1…市勢要覧、※ 2…著者撮影、※ 3…絵葉書²¹⁾、※ 4…写真集²²⁾、※ 5…埼玉新聞²³⁾

6. 多層化地図による考察

6-1 場所への意識の集まる要因

表3は、場所への意識と人々の記憶に残っている4つの要因との関係を表したものである。若泉第一公園、金鑽神社においては、用途・空間・場所意識ともに変化がなかった。若泉第二公園においては、用途・空間共に変化しており、一時期ゴミ捨て場になり場所への意識が遠のくものの、現在でもかなりの割合で意識されている。若泉公園は本庄崖線や元小山川が流れているという自然的環境による意識と知名度の高い若泉公園という空間的立地による意識、さらには若泉公園がいつの時代でも遊ぶ場所であったという行為的継続による意識の3つの意識から人々の記憶に残っているために、多くの意識を集めた。金鑽神社においてもこの3つの意識が働いているため、多くの意識を集めたと考えられる。この意識を若泉第二公園に当てはめてみると、本庄崖線や元小山川という強烈な自然的環境による意識と知名度の高い若泉公園という空間的立地による意識があり、ただの川原からゴミ捨て場、若泉第二公園と用途が変化しながらも、現在まで遊びという行為的継続による意識の記憶が残り、現在までの長い間意識し続けられる結果となったと考察できる。

また、これら3つの意識のほかに、意味層に意識が集中する場所についての考察により、人々の記憶に残るための意識として、様相変化の履歴による意識があると考察できた。この意識は、ある場所において、用途や様相が変更してしまっているにもかかわらず、今は存在しないが昔あった記憶により意識され、他の場所よりも意識されるようになる意識のことをいう。

そのなかでも建物がそのままの形で利用されているまちあい館、ローヤル洋菓子店、市民プラザ、民俗資料館、関根菓子店の事例では、ほとんどの場合で意識される割合が昔の用途よりも高くなっていることがわかる。ローヤル洋菓子店の場合には、昔は全く意識されなかった建物が、継続したことによって意識されるようになった事例である。

次に、建物がなくなってしまい駐車場や空き地になった事例としてはかつて名店街だった場所とかつて赤かんばんがあった場所がある。これらは、現在に意識が集まらなくなるだけでなく、昔の記憶を意識する割合さえも減ってしまう傾向がみられた。

最後に、当時の建物は壊されるものの、建て替えられ別の建物が残っている事例として、北海亭と市立図書館がある。これらは、現在人々に受け入れられる施設であるという理由は当然あるが、昔から意識されている場所であったことにより、ただの図書館やただの居酒屋ではない意識のされ方をしていることで、現在より多くの意識を集めているといえる。

6-2 意味と構造による意識の関係性

図18は、場所への意識の集まった代表的な6箇所において、時代別に意識が抽出された割合を示したものである。多層化地図による分類から、多層的に意識が集まる場所として抽出された若泉公園と金鑽神社においては、意識の集中する割合に変化がなく、安定していることが分かる。また、意味層意識がに集中する場所として抽出された街路である中山道・銀座通り・三交通りはそれぞれ場所への意識が薄れていく傾向が見られ、中山道においては1970年前後に、銀座通りにおいては1990年前後に意識が急激に集まらなくなっている。一方、本庄駅前も意味層に意識が集中する場所として抽出されたが、唯一場所への意識が増加する結果となった。

さらに、こだわりたい場所に着目してみると、若泉公園と金鑽神社において、こだわりたい場所の時ほど意識を集める結果となった。中山道、銀座通り、三交通りに関しては、それぞれ10%前後こだわりたい場所として挙がる結果となった。唯一場所への意識が増加する傾向になっていた本庄駅前に関しては、こだわりたい場所では少数の意識しか集めなかった。

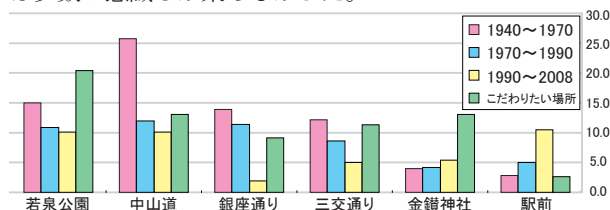


図18. 時代別に抽出された場所意識の割合

7. 総括

7-1 研究成果

本研究の成果は以下の3点である。

- ・今まで、対照されてこなかった構造と意味を多層化地図により対照することを可能にする手法を確立した。
- ・多層化地図を用いることで、強い意識を獲得する4つの要因を明らかにした。
- ・一見無個性な場所と捉えられがちな場所も、記憶により重要な場所となりえるため、人々の意識に着目した整備や保全は大切である。

7-2 今後の展望と課題

今回のデータの集計に当たっては、アナログでの作業となった。今後はGISなどのソフトを利用することでさらに多くのデータを扱えるようにするシステムの構築が課題として挙げられる。また、今回は本庄市の限られた地域と限られた人の場所への意識しか拾えていない。他の地域でも同じような手法でどのような結果が出るのか、もしくは、同じ本庄でも対象者や対象地域を変えるとどのような違いが出るのかを検討する必要がある。

今後の展望としては、多層化地図を利用することにより、意味と構造を反映させ、現在の都市計画の評価や新たな都市計画の可能性について検討していきたい。

《参考文献》

- 1) 全国伝統的建造物群保存地区協議会 H P <http://www.denken.gr.jp/>
- 2) 本庄市市勢要覧、昭和 26 年・33 年・42 年・48 年・54 年・59 年・平成元年・6 年・11 年・16 年
- 3) ランドスケープ・プランニング：創造的な思想の歴史 カー
ル・スタイニッツ Carl Steinitz(Harvard 大学)、ランドスケ
ープ研究、2001.01.29、Vol.65 No.3 Page.201-208
- 4) McHarg 手法と五大湖沿岸の他計画案との生態学的比較
LEE B J(Univ. Tronto, Canada)、Landscape Plannig Vol.9 No.2
Page.147-169 (1982.09)
- 5) Design with nature、イアン・L・マクハーグ / 著、下河辺淳、
川瀬篤美 / 総括監訳、集文社、1994
- 6) 環境庁企画調整局編：自然環境のアセスメント技術（Ⅱ）
生態系・自然とのふれあい分野の調査・予測の進め方、2003、
Page.283-320
- 7) 土木学会編 新体系土木工学 58 都市計画論、中村良
夫・樋口忠彦・北村真一・窪田陽一、技報堂出版、1993、
Page.253-276
- 8) まちづくりにおけるコミュニケーション技術、都市計画
249、堀田昌英、真鍋陸太郎、杉崎和久、2004、Page.55-58
- 9) まちづくりへの参加の新しい局面とその道具としての「ガ
リバー地図」、中村昌広、日本都市計画学会学術研究論文集、
1989、Page.511-516
- 10) インターネット書込地図型情報交流システム「カキコまっ
ぷ」の課題と展開可能性、真鍋陸太郎、小泉秀樹、大方潤一郎、
都市計画論文集、2003、Page.235-240
- 11) 「魚眼マップの計画論」松浦健治郎・野中勝利・笠真希、
早大まちづくりシンポジウム講演資料 2004、Page.61-68
- 12) 早稲田大学吉阪研究室計画：杜の都・仙台の姿—その
将来像を提案する、仙台ディベロッパー委員会発行、1973、
Page.63
- 13) 例えば、岡山市を中心とする鳥瞰図、岡山市産業課、吉
田初三郎画、1932
- 14) マテオ・ダリオ・パオルッチ・宮脇勝「群馬県山村集落六
合村赤岩地区における文化的景観に関する研究-歴史的な絵図、
地籍図、土地台帳を用いた農地のランドスケープの歴史的変遷
-」都市計画論文集、2005、Page.817-822
- 15) 例えば、菊川幸輝・大山勲「歴史の重層した密集市街地
における細街路景観の特徴の抽出-山梨県市川三郷町市川地区
中央部を対象として-」都市計画論文集、2007、Page.85-90
- 16) ゼンリン電子住宅地図デジタウン埼玉県本庄市、2007.2
- 17) 国土地理院地図（1:50000）明治 40 年・昭和 42 年・平
成 10 年
- 18) 本庄市民俗資料館（1:3000）明治 18 年・昭和 42 年
- 19) 本庄市北辺部にみる大河跡の歴史的考察～元小山川流域
における歴史的景観の形成過程～、増田一裕、2007
- 20) 新本庄市の文化遺産—観光資源としての文化財の可能性
—、増田一裕、2005
- 21) 絵葉書「本庄の祭」、本庄市観光協会、1992
- 22) 「ふるさとの思い出写真集明治、大正、昭和、本庄」、昭
和 55 年 3 月 25 日発行
- 23) 埼玉新聞、昭和 32 年
- 24) 佐藤滋他：図説都市デザインの進め方、丸善株式会社、
2005 年 5 月 15 日発行
- 25) まちづくりオーラルヒストリー、水曜社、早稲田大学後
藤春彦研究室、2005
- 26) ビジュアルストーリー本庄歴史街、埼玉県本庄市教育委
員会、平成 9 年 3 月 31 日発行
- 27) 武州本庄歴史地図、埼玉県本庄市教育委員会、平成 2 年
3 月 31 日発行
- 28) 場所の力、著者ドロレス・ハイデン、訳後藤春彦・篠田裕児・
佐藤俊郎、学芸出版社、2002 年 3 月 30 日発行